

## 「冬に暖かい温室（夢の島熱帯植物館） 観察会と第五福竜丸展示館の見学

2024年1月28日、参加者14名で東京都江東区夢の島公園の施設で見学、観察会が行われた。「第五福竜丸保存の歩み 55年」特別展示中の第五福竜丸展示館は正面が二等辺三角形、奥行き50~60m位の二等辺三角柱を横にしたような建物で、木造のマグロ漁船第五福竜丸船体実物（長さ30m重さ140トン）、関係資料、「ガイガー計数管」等展示されている。2階通路からは甲板や操舵室が間近に見える。エンジンは屋外展示。

入館すると、頭上の空間に吊り上げ固定されている遠洋漁業マグロ漁船、「水爆ブラボー」と記された説明パネルに虚を突かれた。その船底の下で、第五福竜丸平和協会の方から話を伺った。

1954年3月1日、太平洋マーシャル諸島にあるビキニ環礁でアメリカが水爆実験「ブラボー」を行った。1945年8月6日広島に投下された原子爆弾「リトル・ボーイ」、8月9日長崎に投下されたプルトニウム型「ファットマン」より強力な破壊力の、核融合反応を利用した水素爆弾で、爆心地から160Km離れていた第五福竜丸に「死の灰（放射性降下物）」をまき散らした。乗組員全23名が被ばくし、半年後、無線長の久保山愛吉さんが死亡した。

『沈黙の春』14章「四人にひとり」には「マグロ漁船第五福竜丸の乗組員久保山氏の数奇な運命をまざまざと思い出させる。」13章「狭き窓より」では「放射能をあびた生物の細胞は、さまざまな障害を受ける。(略)灰色の放射能の雨が地上に降りそそぐようになると、放射能にどんな力が潜んでいるのか・・・(略)放射能がいろいろな恐ろしい影響をあたえることは、いまやひろく理解されてきた」と述べられてもいる。

第五福竜丸はその後、東京水産大学の練習船に使われ、廃船、ゴミ埋め立て地夢の島に捨てられ、全国で保存の取り組みが進み、1976年「原水爆による惨事が再び起らないように」という願いをこめて「展示館が建設された。

ビキニ水爆実験被災70年の今年、ロシアのウクライナ侵攻が続き劣化ウラン弾の使用が報じられてもいるし、世界では核実験が続いてもいる中、展示館見学は、R.カーソンの警告や展示館設立趣旨、「ラッセル=アインシュタイン宣言」を再確認する機会になった。

昼食後、クッシーさんの案内で夢の島熱帯植物館を見学、清掃工場でゴミ焼却した余熱の高温水（125℃）が植物館に熱源として供給されている。熱帯雨林の環境をモデルとした独特の形状をしている大温室のA、B、C各ドーム、オーストラリア庭園、食虫植物温室や映像ホール、屋外にはハーブ畑がある。

Aドームでは熱帯の水辺に生息する植物が見られる。木生シダ、ヘゴ科のマルハチ（丸



木造のスクリュー



第五福竜丸エンジン

八) は小笠原諸島の固有種で、樹高が 7、8m になり、葉が落ちた葉柄の痕跡が丸の中に逆さ八の字模様になっていた。意図せぬ自然の造形が面白い。ニッパヤシを屋根に使用して、魔除けの面が懸けられている「熱帯の家(休憩所)」で一休み。本物のカカオの木(2月にはカカオの生産地の様子やチョコレートができる工程の紹介展が催されるそうだ)、マダガスカル、アフリカ、オーストラリアだけに生えているという『星の王子さま』に出てくるバオバブの木などいろいろな木があった。

C ドームでは世界自然遺産小笠原諸島展。マダガスカル原産のオウギバショウの巨大な葉が天井近く茂っている。東京から父島まで1000Km、植物名に「ムニン」とつく植物が多く、固有種「ムニンヒメツバキ」は小笠原の村の花になっているとのこと。ムニンノボタン、ムニンタツナミソウ、父島の固有種ムニンツツジ(オガサワラツツジ)オガサワラモクマオウ、シマホルトノキ……。ムニンは「無人」と書き、多くの固有種を示すと記されている。



オーストラリア庭園、食虫植物室へ進み、ラフレシアを眺めて見学観察会が終了。

今回、熱帯の植生を垣間見ることで、植物名における小笠原の歴史、自然環境の大きな変化により絶滅が危惧される種も多く、憂慮すべき状況にあることを知りました。

(飯泉京子・記)

## 「都立 第五福竜丸展示館<sup>※1</sup>の見学」の報告

～学芸員市田真理さん(公益財団法人第五福竜丸平和協会事務局長)のお話しに学んで～

報告：厚母宗子

2024年1月28日、核兵器問題を考える勉強会として、「ビキニ事件」から70年の《木造の遠洋マグロ延縄漁船》第五福竜丸展示館を訪れた。

■保存、展示

1954年3月1日、太平洋マーシャル諸島にあるビキニ環礁でアメリカが行った水爆事件によって被害を受けた第五福竜丸は、原水爆による惨事がふたたび起こらないようにという願いを込めて保存、展示・公開されている。

入館を大漁旗に迎えられた。レプリカだがこの船の本来の目的や喜びを表現され、展示物の「死の灰」やパネルの内容の深刻さと対比された。展示館自体とても綺麗に管理されている上に、船体は素材の風化年齢を伝えるが隙間に埃ひとつなく手入れが行き届いていて、この館の運営管理の細やかな心遣いに清澄さが伝わった。

因みにこの展示館は二人の学芸員とボランティアで、お掃除から、来館者の対応、資料の整理、広報などさまざまなことを一手にされているとのこと。

開館は1976年6月10日。都立の施設だが東京都から委託を受けて『公益財団法人第五福竜丸平和協会<sup>※2</sup>』（前身は『財団法人第五福竜丸保存平和協会』）が管理運営をしている。前身設立から昨年11月28日で50年を迎えた。

#### ■市田真理さんのお話

この度の勉強会でお話ししてくださったのは、学芸員で事務局長の市田真理さん。約30分かけて丁寧でわかりやすく、“まさに今”感じて考えることの大事さ、その思いの純粋さが伝わるお話しぶりに静かな感動を覚えた。

お話はまず保存運動の奇跡の軌跡から始まった。

1967年、廃船処分となり屑化することを条件に解体業者に払い下げられ、夢の島（当時は交通の便がない）のゴミの中のドロドロの水の中に浮いて傾いて朽ち果てようとしていた。その船があのだ第五福竜丸と気づいた人がいて、ニュース（1968年3・1ビキニデー）に取り上げられ、新聞投書「沈めてよいか第五福竜丸」の掲載、1969年4月「被爆の証人第五福竜丸保存の訴え」発表、その芯にある思いご苦労が今に繋がっている。

市田真理さんの説明は、70歳の証人第五福竜丸の守護の人のような穏やかな語りである。「小瓶に入れて展示されている白い粉の正体は？漁師たちが見た色と光、8分後の音、そして白い灰（死の灰）の降塵」続いてパネルの説明を簡略にでも要点を印象深く淡々とお話しくださった。水爆実験の被害、乗組員の病状、マグロ騒動、放射能雨、原水爆反対の運動、太平洋の核汚染状況、日米政府による事件の決着、マーシャル諸島の核被害、世界の核実験被害、核実験・核開発年表などの展示について。

当時の新聞記事、被災地分布図でかなりの広がり分かり、被災船の多さもわかった。核実験の年表によると2年間で67回も実験されていたという事実に胸を抉られた。マーシャル諸島の人たちの犠牲は、『身体だけではなく見えない心も被災された』と食文化や住まいの変化と影響などについても具体的にお話しくださった。

#### ■市田さんへのインタビュー

当時の新聞記事、図や年表からの読み取りやその理解をもっと深めたい、市田さんのお人柄、話ぶりにもとても感動し、もう一度お話を伺いたいと思っていたところ、3月26日に高校生平和ゼミナールで市田さんがお話しされるという情報を得て再び訪れた。会場いっぱい高校生達と引率の先生方で熱気を帯びての講演後、お話しを伺うことが出来た。

その時のインタビューの抜粋である。

「ビキニ事件から70年。乗組員だった大石又七さんは、2021年3月7日に亡くなった。大石さんは1983年中学生から事件のことを聞かれたことをきっかけに沈黙を破り、国内外で700回を超える講演活動をするなど、核実験の被害者救済と核廃絶を訴えた。未来の命のために戦い続けた87年の生涯だった。『大石さんは、展示館でも小中高生にたくさんお話をされた。お亡くなりになり当事者がいなくなった。その時、“私は語り継ぐ人になります”と思った。そして、語り継ぐ人には当事者性があると思った。『私だけが語り継ぐ人ではない。ラストアンカーではない。次々に繋いでいきます。』この思いから展示館でも話をします。知らない人に知ってもらう。忘れかけた人にも思い出してもらおう。』と、淡々としっかりと想いの確かさが伝わってきた。

「当時の不安な思いを23人だけに背負わせないで欲しい。いろんな人が繋いで欲しい。」  
「核なき世界へ向けて 第五福竜丸は航海中」と。

#### ■youtube 番組ポリタス TV : 「ビキニ事件」から70年、今に続く被曝問題を学ぶ (\*3)

市田さんがご出演の番組をご紹介いただき、視聴により深く知り多くの学びを得た。以下にまとめてみた。

問題の本質：

・本件を福竜丸事件だけに注目すると、問題の本質が矮小化されてしまう懸念。(被害の一端しか観ることができていない)

判明しているだけでも 992 隻の漁船が汚染魚を廃棄している、という事実。太平洋上の広い海が放射能で汚染された。原水爆実験の影響を受けた汚染魚は広範囲に分布している。

・マーシャル諸島の人々の苦しみと闘いも現在まで続いている。

・また米国以外の国々（ロシア、英国、仏、中国、インド、パキスタン、北朝鮮など）も繰返し核実験を行ってきている現実もある。それに伴い、被爆者も世界各国に存在する。弱者が多いことから誰かが目や耳を傾けないとこの事実が伝わらない。

・健康被害に加え環境被害、コミュニティ崩壊にも注目する必要がある

メッセージ：

展示館：「第五福竜丸は原水爆のない未来へと航海をつづけます」  
久保山愛吉（無線長）被爆時 39 歳：「原水爆の犠牲者は、わたしを最後にしてほしい」  
被爆後半年 40 歳で死去。  
大石又七（冷凍士）被爆時 20 歳：「Learn and Know the truth（真剣に学び、真実を知ってください）」当初は、自分の健康不安や家族への差別、金銭補償に対する周囲のやかみなどにより沈黙していたが、展示館開設後 1983 年から真実を語り始める。

新藤兼人（映画監督）：「第五福竜丸は生きている」  
市田真理：「過去は変えられないが、未来は変えることができる」「みんなの船、第五福竜丸」

一隻の水爆被害漁船の保存と伝承の努力から学ぶ：  
①核兵器の恐ろしさ（健康被害、環境破壊）、②保存伝承活動が示す市民運動の良識と力、  
③史実の正しい記録と整備の重要性

#### ■【福竜丸だより】

展示館ショップで求めた平和協会が発行している【福竜丸だより】※4（隔月発行）

2023.11.01No.438号で保存の歩みをより知ることができた。（以下、参考引用）

この展示館には、何度も足を運んでくださる方がいるとのこと。「以前に行った時とは違

うものを感じた。前は気にならなかったことが、深くわかった。」(高校1年)「前に来たときより詳しくわかった分、怖いなあと思った。戦争はこの世界から消えてほしい。」(中学1年)横須賀おやこ劇場に参加する若い人たちは、訪れるたびに新たな発見をして後輩たちに繋げている。演劇集団「燐光群」は『わが友、第五福竜丸』と題して演劇作品で核問題提言をした。70年の節目を迎える直前の昨年11月7日～26日。座・高円寺で公演、名古屋、焼津、吹田、岡山、高知、串本町と地方公演も行った。上演前には俳優さんスタッフさん皆さんで展示館を訪れ「気候変動も含め第五福竜丸が投げかけている問題は、今を生きる私たちの課題です。」と語った。戦争と平和について考え、自然を守り人間の未来を希求する作品を作っているこのような活動に身を正される思いがした。

参考：

※1 都立第五福竜丸展示館 <http://d5f.org>

※2 公益財団法人第五福竜丸平和協会 <http://d5f.org/>

※3 ポリスタ TV 放送 2024/2/26 取材：宮崎園子(MC) 『ビキニ事件から70年 いまに続く被曝問題を学ぶ』

<https://www.youtube.com/watch?v=YQC9x7JcxTE&t=847s>

※4 第五福竜丸だより(隔月発行)のバックナンバーは創刊号より順次アーカイブされる予定とのこと。

備考：

◆市田さん情報：展示館のマネジメントの他、全国あちこちで呼ばれては講演会もなさっていらっしゃる。

◆年間来館者数について：コロナ前は約10万人。修学旅行、遠足など学校団体は400校くらい。コロナ以後は約8割。1976年6月開館以来来館通算者数は580万人を超えた。全国から海外からも。

◆展示館前ひろばについて

・久保山愛吉記念碑

乗組員は23人で被災当時18～39歳という若さ。全員「急性放射線症」

で入院した。無線長の久保山愛吉さんは、被爆6ヶ月後に「原水爆の被害者は私を最

後にして欲しい」と言葉を残して40歳で亡くなった。

- ・第五福竜丸エンジン
- ・マグロ石塚

～最後に～

歴史で知っていた文字の中のことが、より具体的に知ることができ、核への問題を心で感じることができた。核実験、軍拡、東日本大震災の原発事故による被害など放射能汚染の問題が強く胸に迫っている。

(厚母宗子 記)